

**An Introduction to Mobile-Research Method (Part II)****モバイルリサーチ II**

担当：加藤文俊（かとうふみとし）

メール：fk@sfc.keio.ac.jp

研究室：L407（内線 53247）

**【テーマ】**

ケータイは、わたしたちの日常生活のリズムを変え、より重層的なコミュニケーションを「いつでも・どこでも」可能にするメディアとして理解することができます。最近では、とくにマーケティングの分野で生活者調査にケータイ（カメラ付きケータイ）を活用する事例が増え、“モバイルリサーチ”として認知されつつあります。

つねにわたしたちの手の中にあるケータイを、“通信機能を内蔵したデジタルカメラ”として考えるとき、「社会調査」という観点、とりわけ、生活誌・生活史やライフヒストリー・アプローチとの関連で考えることはきわめて興味ぶかいと思われれます。身体とともに移動する、ケータイのカメラによって切り取られる日常の「ひとコマ」は、ひとつの「生活記録」として理解することができます。そして、日々、さまざまな場面で写され蓄積されてゆく写真を、時間的に、あるいは空間的に分類・配列することによって、個人の行動軌跡や人びとが集った「現場」をある程度再現することができます。

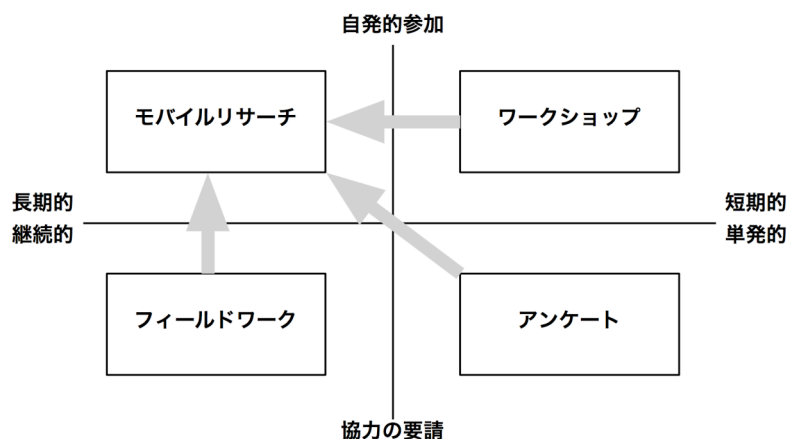
ライフヒストリー・アプローチにおいて欠くことができないのは、観察や記録のための技術や方法で、さまざまなメディアの活用によって調査自体のデザインも変化してきました。たとえばビデオやオーディオによる記録によって、調査の「現場」をある程度まで復元することができます。人と人とのコミュニケーションを分析する際に、ビデオを活用することによって、会話のみならず、ちょっとした仕草や目線、身体の向きなども併せて分析できるようになりました。何度もくり返してビデオを見ることで、人と人との微細なコーディネーションについて理解を深めることができるのです。“デジタルカメラとしてのケータイ”を活用した調査は、以下のような点で、これまでの調査方法、ひいてはわたしたちのもの見方・考え方を変えうるのではないかと思います。

**(1) 調査に関わるコスト感覚の変容**

まず、ケータイをはじめとするあたらしいメディアを活用することによって、調査に関わるコスト、そして調査に対する心理的な感覚が変容する可能性があります。ここで言うコストは、研究者による調査のデザイン・実施・運営に関わるコストのみならず、被調査者の心理的な負担などをもふくめたものです。デジタルメディアの“モニター機能”ともいべき特質を活用することによって、非干渉的、あるいは相互干渉的といえる調査方法のあたらしい方向性を模索することができるはずで、カメラ付きケータイを活用することによって、これまで手（目）の届かなかった、生活者の日常に接近することができるからです。

**(2) プロセスとしての調査**

さらに、調査に関わる時間感覚も変化する可能性があります。従来の調査は、たとえばアンケート調査（質問紙調査）の場合は、質問票の配布から回収という一連の流れが、ある決められた時間のなかでおこなわれてきました。もちろん、わたしたちが調査・研究の「しめきり」から解放されることはないと思いますが、あたらしいメディアの特質を活かすことによって、時間的な範囲を拡大した調査が可能になります。身体とともに移動するというケータイの特質を生かして、「いつでも・どこでも」データ収集が可能になれば、調査そのものの「始まり」や「終わり」を同定することが困難になります。現に、こうしたアイデアにもとづいた調査システムの開発が試みられており、逐次更新されるデータにもとづくアドホックな調査結果を、そのつど解釈していくというあたらしいスタイルが提案されています。このことは、調査そのものの目的を再定義す



ることになるでしょう。

### (3) 自発的・不可避的なデータの蓄積

すでに述べたように、つねに携帯することが習慣となっているケータイを社会調査に用いることによって、調査自体の「終わり」（そしてある場合には「始まり」）が不明確になり、また調査に関わる金銭的・物理的・心理的なバリアーの軽減にいたるはずで

す。このような状況は、被調査者による自発的なデータの収集・蓄積と密接な関係を持ちます（被調査者という言い方自体も問い直すことになるはずで）。また、センサー技術の発展をつうじて、近い将来には、壁やまち並みに装着されたメディアとケータイとが連動することによって、いわば不可避的にデータが収集されていく可能性もあります。当然のことながら、セキュリティやプライバシーなどさまざまな問題がありますが、わたしたちがケータイなどの機器を持ち歩くことによって、ある種のデータが自動的に収集・蓄積されていくという方向性が考えられます。

この特別研究プロジェクトでは、上述のようなあたらしい調査法の特質とその潜在的なインパクトを考えながら、〈社会や文化を知るための方法/活動〉としてのモバイルリサーチの可能性を検討します。実際に、坂出市（香川県）でフィールド調査をおこない、ワークショップ等の運営をしながら、できるかぎり具体的な理解を試みるつもりです。

### 【履修条件/予定学生数】

近年、“フィールドワーク”ということばが一般的に使われるようになりましたが、“フィールドワーク”においては、地道に観察・記録をおこなうこと、時間をかけてデータの整理や解釈を試みるのが重要です。つまり、知識を生成するための“技法”としてのトレーニングには（それなりの）時間とエネルギーが必要なのです。また、さまざまなモバイル・メディア（たとえばカメラ付きケータイやハンディ GPS など）を活用したあたらしい調査方法について考える、“実験するマインド”も要求されます。

2007年度春学期の特別研究プロジェクトは、「モバイルリサーチ」（2005年度秋学期「特別研究プロジェクト」）の“続編”として、地域コミュニティにおけるワークショップ等の企画・運営の実践をつうじて、モバイルリサーチの可能性について考えます。15～20名程度の学生数を想定しています（希望者多数の場合は選考）。以下のような学生の履修を歓迎します：

- ・地域コミュニティにおける社会活動や、あたらしい“まちづくり”の方法論に関心がある。
- ・カメラ付きケータイをはじめとするモバイルメディアを活用した、フィールド調査に興味がある。
- ・フィールドワークに時間・エネルギーを使うことができる（つもりがある）。
  - ※ ナレッジスキル科目「フィールドワーク法」をすでに履修していることが望ましい。
  - ※ 加藤が担当する「研究プロジェクト（研究会）」の履修者/既修者を優先的に受け入れることがある。

### 【実施期間/実施場所】

- 2007年7月27日（月）または28日（火）（オリエンテーション：履修者と調整）
- 2007年8月4日（土）～5日（日）（フィールドワーク/ワークショップ：香川県坂出市）
- 2007年8月7日（火）（まとめ/ふりかえり：履修者と調整）
- 2007年9月10日（月）（成果のまとめ/アウトプットの提出期限：予定）

### 【構成・運営方法】

今回の特別研究プロジェクトでは、方法/活動としてのモバイルリサーチについて、理論的な問題をレビューするとともに、じっさいにまちを歩き、データ収集をめぐる問題点や課題を実践的に理解することを目指します。8月4日（土）～5日（日）は、全員で坂出市（香川県）に出かけてフィールドワークやワークショップをおこないます。

#### スケジュール（暫定版・5/31）

1	7/27（金） （180分）	オリエンテーション（SFC）  ● モバイルリサーチの可能性 ● 考現学の思想と方法 ● 基本的な考え方 ● スケジュールの確認
2	8/4（土） （540分+）	フィールドワーク（香川県坂出市） 1泊2日 ※ 現地集合・現地解散 ※ 一部の予定については、調整中  ● 坂出での活動について ● 内側から見る（寄留者としてのポジションの獲得） ● ぷちインターンシップ（坂出市商店街における参与観察） ● 反省会・交流会（坂出市役所・坂出市青年会議所ほか、予定）
3	8/5（日） （540分+）	フィールドワーク（香川県坂出市）  モバイルリサーチの実践 ● ポッドウォーク（まち歩き用音声ガイド）収録 ● 風俗採集調査 ● 商店街における回遊行動調査 ● その他 ワークショップ ● 「オーディオペーパー（紙レコ）」を活用した住民参加型ワークショップの運営
5	8/7（火） （180分+）	まとめ/ふりかえり（SFC）  ● ディブリーフィング ● フィールドワークをまとめる（文化を書く） ● 成果の公開と第三者に向けた ● 今後の課題について

\* フィールドワークの成果（最終課題）は9月10日（月）まで（予定）に提出する。2007年度秋学期に履修登録し、2単位を申請することができる。

\* 協力：坂出市役所/坂出青年会議所（予定）、オーディオペーパー提供：トッパンフォームズ株式会社

### 【教材】

下記は参考文献です。必要に応じて、クラスで資料や文献リストを配布します。

- インフォプラント（監修・編集協力）/宣伝会議（編集）（2005）『実践!! モバイルリサーチ：携帯電話がリサーチを変える』（宣伝会議）
- 海野弘（2004）『足が未来をつくる：〈視覚の帝国〉から〈足の文化〉へ』（洋泉社）
- ギャーツ, C.（1996）『文化の読み方/書き方』（岩波書店）
- ゴフマン, E.（1980）『集まりの構造：新しい日常行動論を求めて』丸木恵祐・本名信行（訳）（誠信書房）
- コプマー, T.（2004）『ケータイは世の中を変える』川浦康至・溝渕佐知・山田隆・森祐治（訳）（北大路書房）
- 今和次郎（1987）『考現学入門』藤森照信（編）（ちくま文庫）
- 今和次郎（編）（2001）『新版大東京案内（上・下）』（ちくま学芸文庫）
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』（せりか書房）
- 佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク』（新曜社）
- 佐藤健二（1994）『風景の生産・風景の解放』（講談社選書メチエ）
- 鳥越けい子（1997）『サウンドスケープ：その思想と実践』（鹿島出版会/SD選書）
- ホワイト, W.（2000）奥田道大・有里典三（訳）『ストリートコーナー・ソサエティ』（有斐閣）
- ヴァン=マーネン, J.（1988）森川渉（訳）『フィールドワークの物語：エスノグラフィーの文章作法』（現代書館）
- 箕浦康子（編著）（1999）『フィールドワークの技法と実際：マイクロ・エスノグラフィー入門』（ミネルヴァ書房）
- 宮部修（1997）『インタビュー取材の実践』（晩聲社）
- 好井裕明（2006）『「あたりまえ」を疑う社会学：質的調査のセンス』（光文社新書）
- 好井裕明・三浦耕吉郎（編）（2004）『社会学的フィールドワーク』（世界思想社）